

多民族・多言語社会における言語選択と 使用に関する社会言語学的研究 —キルギスの大学生を対象とした調査の結果から—

西 條 結 人

1. はじめに

キルギス共和国（以下、キルギス^(注1)とする）は旧ソ連構成国の1つで、言語は国家語をキルギス語、公用語をロシア語とし、人口610万人、90以上の民族が暮らす多言語・多民族国家である（国連人口基金、2018; Orusbaev et al., 2008）。キルギスには1,500人を超える日本語学習者が存在し（国際交流基金、2017）、ウズベキスタン、カザフスタン、タジキスタン、トルクメニスタン、キルギスの中央アジア5か国において日本語学習者の人口密度が1位となっており（氏原、2015）、今後も日本語学習者数の増加が見込まれている。キルギスにおける日本語教育研究については、日本語教育の現状や課題を分析した研究（入山、2010；ヴォロビヨフ、2013；氏原、2015；西條、2017）や、日本語教育実習や動画制作を通じた日本語使用機会の確保や日本語による情報の発信等の様々な取り組み（西條、2016；西條他、2016a；田岡他、2017）、学習者の理想の日本語教師像に関する研究（西條他、2016b）が行われている。しかしながら、多民族・多言語社会のキルギスにおいて日本語学習者が日常生活でどのような言語を選択し、使用しているのかについては明らかにされていない。フィッツジェラルド（2010）は、異なった言語には異なった文化的価値観が内在し、その価値観はコミュニケーション・スタイルを含めた様々な行動に影響を与えると述べており、日本国外における日本語教育の質の向上においては、日本語教育の現状や学習者数の把握、日本語教育方法の改善等だけではなく、日本語学習者の背景にある母語による言語生活の実態を明らかにすることは必要であると考えられる。多言語環境にある学習者の母語場面でいかなる言語が選択され、使用されているか、また法的な位置づけと実際の言語使用を比較することは、その国の言語と社会の関わりを明らかにすることにつながり、多民族・多言語社会における言語教育を考える上でも重要であると思われる。

本研究では、バイリンガル環境にあるキルギスの大学生に着目し、大学生にとって身近な生活場面の中で、キルギス語とロシア語の使い分けを含んだ使用の実際を明らかにすることを目的にする。なお、本研究における「バイリンガル」とは「日常生活において2つもしくはそれ以上の言語（あるいは方言）を使用する人々（Grosjean, 2008）」とする。

(2)

2. 先行研究

キルギスのバイリンガルに関する先行研究としては、ソビエト時代のキルギスにおけるバイリンガルの言語状況 (Orusbaev, 1990) や、言語意識と教育の関わり (Korth, 2005)、キルギス共和国独立以降の言語政策と社会に関する研究 (小田桐、2015) 等が挙げられる。

Orusbaev (1990) はソビエト時代のキルギスにおけるバイリンガルの言語状況を地域別に「チュイ及びタラス地域」「イシククリ及びテン・シャン地域」「オシュ地域」の3つに分類している。

表1 ソビエト時代のキルギスにおけるバイリンガルの類型 (Orusbaev, 1990)

チュイ及びタラス地域
キルギス語－ロシア語、ロシア語－キルギス語、カザフ語－ロシア語、カザフ語－キルギス語、タタール語－ロシア語、ウイグル語－ロシア語、ウイグル語－キルギス語、朝鮮語－ロシア語、ウズベク語－ロシア語、ウズベク語－キルギス語
イシククリ及びテン・シャン地域
キルギス語－ロシア語、ロシア語－キルギス語、カザフ語－ロシア語、カザフ語－キルギス語、ウイグル語－ロシア語、ウイグル語－キルギス語、ドゥンガン語－ロシア語、ドゥンガン語－キルギス語、タタール語－ロシア語、タタール語－キルギス語、ウズベク語－ロシア語、ウズベク語－キルギス語、ドイツ語－ロシア語
オシュ地域
キルギス語－ロシア語、キルギス語－ウズベク語、タタール語－ロシア語、タタール語－キルギス語、タジク語－ロシア語、タジク語－ウズベク語、ウズベク語－ロシア語、ウイグル語－ロシア語、ウイグル語－ウズベク語、アゼルバイジャン語－ロシア語、アゼルバイジャン語－キルギス語、クルド語－ロシア語、クルド語－キルギス語

表1を見ると、「チュイ及びタラス地域」は10通り、「イシククリ及びテン・シャン地域」は13通り、「オシュ地域」は13通りと多様なバイリンガル・タイプがキルギス国内に存在していたことがわかる。3つの地域に共通するバイリンガル・タイプは「キルギス語－ロシア語」「タタール語－ロシア語」「ウイグル語－ロシア語」「ウズベク語－ロシア語」であり、それらのタイプがキルギス国内に広く存在していたことがうかがえる。

Korth (2005) は、学校 (キルギス語学校とロシア語学校^(註2)) の教授言語と居住地によってキルギス語とロシア語の言語習得の結果を次の表2のように明らかにしている。

表2 初等中等教育における言語能力の類型 (Korth, 2005 : 小田桐, 2015 を引用)

	都市部の学校		農村部の学校	
	ロシア語学校	キルギス語学校	ロシア語学校	キルギス語学校
クラス構成 (入学時)	キルギス語とロシア語それぞれの単一言語話者、二言語話者	キルギス語単一言語話者、二言語話者	主にキルギス語単一言語話者	キルギス語単一言語話者
言語習得の結果	ロシア語単一言語使用の維持またはロシア語単一言語使用への移行	キルギス語とロシア語の二言語使用	弱く、アンバランスな二言語併用	キルギス語単一言語使用

表2を見れば、都市部のロシア語学校に通う生徒の中でも、キルギス語単一言語話者の生徒は、ロシア語のモノリンガルになることが考えられることから、第一言語のキルギス語と第二言語のロシア語が入れ替わり、キルギス語を意識的に使用しなくなる、もしくは第一言語を消失する「減算的バイリンガル (Subtractive bilingual)」の可能性が考えられる。一方で、都市部のキルギス語学校と農村部のロシア語学校では、習熟度に差はあるもののキルギス語を維持し、ロシア語を習得していることから「加算的バイリンガル (Additive bilingual)」になる傾向にあることが推測される。

Korth (2005) は初等中等教育段階では表2の4つのタイプに分かれることが指摘されているが、高等教育段階については明らかにされておらず、大学生の実際の言語使用についてはさらなる分析を行う必要がある。なお、キルギス国内の大学における教授言語については、ロシア語 67.9%、カザフ語 0.1%、キルギス語 30%、ウズベク語 1.3%となっており、ロシア語が教授言語としては過半数以上を占めており (Brunner & Tillett, 2007)、ロシア語が教授言語である教育機関は権威があり、地位が高いことが指摘されている (中澤他, 2006)。

キルギスの国内法や言語政策とキルギス国民の実際の言語使用を明らかにした研究としては小田桐 (2015) が挙げられる。小田桐 (2015) は1991年のキルギス独立以降のキルギス語とロシア語をめぐる政策を概観し、次のようにまとめている。

表3 キルギス語とロシア語の法的位置づけ比較 (小田桐, 2015)

	国家・社会活動のための言語	国家の象徴	民族間交流のための言語	対外関係のための言語
キルギス語	○	○	○ (2004 ~)	○
ロシア語	○ (国家語に影響を及ぼさない範囲)	×	○	○

(4)

表3のように、現状ではキルギス語とロシア語の2つの言語が民族間交流のための言語としての役割を担っている。しかしながら、小田桐（2015）は、キルギスにおいて法的には民族間交流語は「キルギス語」と「ロシア語」と位置付けられているが、実際の言語使用においてはキルギス人がキルギス人以外の他の民族と話す場合はロシア語を使用し、ロシア語が民族間交流のための言語と認識されている一方で、キルギス語は民族間交流のための言語であるという認識が不足している現状であると報告している。

渋谷（2007）は、1990年から1995年にロシア科学アカデミーロシア語研究所が実施した調査をもとに、キルギス人の中では日常生活および社会生活においてキルギス語のみで用を済ませているのは少数であり、多くのキルギス人がロシア語とのバイリンガルで、かつ実生活において相当程度発達していると述べている。このことからキルギス人同士の日常生活場面での会話においても主としてロシア語が使われていることが示唆されている。

一方で、本稿末尾資料1の1994年のキルギスにおける言語使用を見ると、「家庭」「学校もしくは大学」「職場」の3つのカテゴリーのいずれにおいても、キルギス人はキルギス語使用の割合が高いという調査結果も出ている（Landau & Kellner-Heinkele, 2001）。キルギス人以外の民族の「学校もしくは大学」における言語使用を見れば、ウズベク人を除いて、所属民族の言語よりもロシア語の使用頻度が高いことがわかる。しかしながら、Landau & Kellner-Heinkele（2001）で示されているデータはカテゴリーが「学校もしくは大学」となっており、初等中等教育機関のように教授言語の区別がない高等教育機関とで校種別には判断が難しいものになっている。

そこで、初等中等教育終了段階における4タイプの生徒（Korth, 2005）が混在する環境である大学での言語使用に着目し、大学生の言語選択とその使用を明らかにする。前述の先行研究の分析を踏まえ、本研究ではキルギスの大学に通う大学生の実際の言語使用を明らかにすることを目的とする。研究目的を達成するため、以下のような研究課題を設定した。

・バイリンガル環境にあるキルギスの大学生は、大学生生活に身近な場面においてキルギス語とロシア語あるいはキルギス語かロシア語という選択をどのように行い、実際はどのように使用しているのか。

3. 質問紙調査の概要

質問紙調査は、2018年2月から3月にかけて、ビシケク人文大学東洋国際関係学部とキルギス国立総合大学国際関係学・東洋学部に通う大学生118名（キルギス語学校出身者32名、ロシア語学校出身者86名）を対象に実施した。表4は今回実施した質問紙調査の回答者に

関する情報である。なお、Korth（2005）において、出身学校やその所在地によって言語習得に違いがあることが示唆されているが、今回はそれぞれの出身学校が混在する大学での言語状況を調査することを目的としたため、記入を求めなかった。

表 4 質問紙調査の回答者に関する情報

	キルギス語学校出身学生	ロシア語学校出身学生
人数	32名	86名
性別	男性11名、女性21名	男性14名、女性72名
民族	キルギス系32名	キルギス系70名、朝鮮系9名、カザフ系3名、ロシア系2名、ドイツ系1名、タタール系1名
平均年齢	19.12歳	19.52歳

調査用紙に関しては、キルギスの言語事情に合わせ、キルギス語とロシア語を併記した。調査項目については、「日常生活に関する項目（3問）」「学校教育に関する項目（5問）」「通信関係に関する項目（5問）」からなる。それぞれの質問項目について、回答者が発信する立場にある項目については、「キルギス語のみを使用」「ロシア語のみを使用」「ほとんどキルギス語を使用」「ほとんどロシア語を使用」「キルギス語とロシア語を同じくらいの割合で使用」「その他」を選択し、回答者が受信する立場にある項目については、「キルギス語のみ」「ロシア語のみ」「キルギス語とロシア語の両方」「その他」を選択してもらうことにし、質問紙調査を実施した。

なお、調査の実施に先立ち、キルギス国立ビシケク人文大学東洋国際関係学部日本語日本文学講座所属のキルギス人教員2名（キルギス語ネイティブ1名、ロシア語ネイティブ1名）に、キルギスの人々にとって不自然な質問項目がないかどうかの確認をもらったうえで実施した。

4. 結果と考察

集計された質問紙調査結果を「その他」と「無回答」を除いて、「キルギス語のみを使用：1点」「ほとんどキルギス語を使用：2点」「キルギス語とロシア語を同じくらいの割合で使用：3点」「ほとんどロシア語を使用：4点」「ロシア語のみを使用：5点」として、平均値を算出した。

4. 1. キルギス語学校出身学生の調査結果

キルギス語学校出身学生の言語選択及び使用については、次の表5の通りであった。

(6)

表5 キルギス語学校出身学生の言語選択及び使用の平均値

質問項目	キルギス語学校出身学生	
日常生活に関する項目	1. 1. 話すときの使用言語	2.53
	1. 2. 読む・書くときの使用言語	3.41
	1. 3. 考えるときの使用言語	1.87
学校場面に関する項目	2. 1. 教師と授業内でのやりとり	3.80
	2. 2. 友人と授業内でのやりとり	3.06
	2. 3. メモ・ノートテイキング	3.57
	2. 4. 教師との授業外のやりとり	3.25
	2. 5. 友人と授業外のやりとり	2.53
通信関係に関する項目	3. 1. 電話	2.61
	3. 2. SNS	3.40
全体平均	3.00	

表5より、キルギス語学校出身学生の特徴として「1. 3. 考えるときの使用言語 (1.87)」が挙げられ、思考をする際にはキルギス語を用いていると考えられる。また、日常生活でどのようなマスメディア（新聞、テレビ、インターネット）と接触しているかについては、表6の通りであった。

表6 キルギス語学校出身学生のマスメディアとの接触状況 (n = 32)

	新聞	テレビ番組	インターネット
ロシア語のみ	7 (21.8%)	7 (21.8%)	23 (71.8%)
キルギス語・ロシア語両方	21 (65.6%)	21 (65.6%)	7 (21.8%)
キルギス語のみ	1 (3.1%)	0 (0%)	0 (0%)
その他	3 (9.3%)	4 (1.2%)	2 (6.2%)

表6からキルギス語のみのメディアを利用する大学生が少ないことが明らかになった。新聞とテレビ番組に関してはキルギス語とロシア語両方でテレビ番組を視聴する大学生が多数を占めている。一方で、インターネットについては、ロシア語のみで利用する大学生が多かった。

4. 2. ロシア語学校出身学生の調査結果

調査の結果、ロシア語学校出身の大学生の言語選択については、次の表7の通りであった。

表7 ロシア語学校出身学生の言語選択及び使用の平均値

	質問項目	ロシア語学校出身学生
日常生活に関する項目	1. 1. 話すときの使用言語	3.86
	1. 2. 読む・書くときの使用言語	4.26
	1. 3. 考えるときの使用言語	4.05
学校場面に関する項目	2. 1. 教師と授業内でのやりとり	4.37
	2. 2. 友人と授業内でのやりとり	4.21
	2. 3. メモ・ノートテイキング	4.56
	2. 4. 教師との授業外でのやりとり	4.46
	2. 5. 友人と授業外でのやりとり	4.15
通信関係に関する項目	3. 1. 電話	3.77
	3. 2. SNS	3.96
全体平均		4.16

表7より、ロシア語学校出身学生の特徴として、「1. 2. 読む・書く時の使用言語 (4.26)」「1. 3. 考えるときの使用言語 (4.05)」「2. 1. 教師との授業内でのやりとり (4.37)」「2. 2. 友人との授業内でのやりとり (4.21)」「2. 3. メモ・ノートテイキング (4.56)」「2. 4. 教師との授業外でのやりとり (4.46)」「2. 5. 友人との授業外でのやりとり (4.15)」と平均値が4点以上と高かった。ロシア語学校出身の大学生が日常生活でどのようなマスメディア(新聞、テレビ、インターネット)に接触しているかについては表8の通りである。

表8 ロシア語学校出身学生のマスメディアとの接触状況 (n = 86)

	新聞	テレビ番組	インターネット
ロシア語のみ	64 (74.4%)	52 (60.4%)	73 (84.8%)
キルギス語・ロシア語両方	18 (20.9%)	27 (31.3%)	5 (5.8%)
キルギス語のみ	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
その他	4 (4.6%)	7 (8.1%)	8 (9.3%)

表8からロシア語学校出身の学生は「新聞」「テレビ番組」「インターネット」に共通して

(8)

ロシア語のみで接触している者が多い傾向にある。また、キルギス語・ロシア語の両方と接触する学生も見受けられるが、キルギス語のみと回答する学生はいなかった。「その他」を選択した回答者の中には、回答者の民族の言語を選択した者も見られた。

4. 3. 考察

本節では、キルギス語学校出身学生とロシア語学校出身学生の結果を比較し、分析を進めていく（表9、表10）。

表9 キルギス学校出身学生とロシア語学校出身学生の言語使用

質問項目		キルギス語学校 出身学生	ロシア語学校 出身学生
回答者自身にかかわ る項目	1. 1. 話すときの使用言語	2.53	3.86
	1. 2. 読む・書くときの使用言語	3.41	4.26
	1. 3. 考えるときの使用言語	1.87	4.05
学校場面に関する項目	2. 1. 教師と授業内でのやりとり	3.80	4.37
	2. 2. 友人と授業内でのやりとり	3.06	4.21
	2. 3. メモ・ノートテイキング	3.57	4.56
	2. 4. 教師との授業外のやりとり	3.25	4.46
	2. 5. 友人と授業外のやりとり	2.53	4.15
通信関係に関する項目	3. 1. 電話	2.61	3.77
	3. 2. SNS	3.40	3.96
全体平均		3.00	4.16

表10 キルギス学校出身学生とロシア語学校出身学生のマスメディア接触状況

	新 聞		テレビ番組		インターネット	
	キルギス 語 学 校	ロ シ ア 語 学 校	キルギス 語 学 校	ロ シ ア 語 学 校	キルギス 語 学 校	ロ シ ア 語 学 校
ロシア語のみ	7 (21.8%)	64 (74.4%)	7 (21.8%)	52 (60.4%)	23 (71.8%)	73 (84.8%)
キルギス語・ ロシア語両方	21 (65.6%)	18 (20.9%)	21 (65.6%)	27 (31.3%)	7 (21.8%)	5 (5.8%)
キルギス語のみ	1 (3.1%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
その他	3 (9.3%)	4 (4.6%)	4 (1.2%)	7 (8.1%)	2 (6.2%)	8 (9.3%)

表9より、キルギス語学校出身学生は、授業外での改まった場面ではない状況下や友人のように親しい間柄の接触ではキルギス語を用いていることがうかがえる。ロシア語学校出身学生は、全体的にロシア語の使用率が高いものの、普段の会話や電話、SNS内でキルギス語とロシア語の両方を用いることが明らかになった。先行研究において、キルギスでは初等中等教育終了の段階で、出身学校の所在地と教授言語によって、ロシア語モノリンガル話者、キルギス語モノリンガル話者、キルギス語とロシア語のバイリンガル話者に大別できることが報告されている (Korth, 2005)。高等教育段階ではキルギス語とロシア語の両方を併用、もしくはロシア語を使用することが求められる可能性が高いため、農村部のキルギス語学校出身者にとってはそれ以外の学校出身者、特に都市部のロシア語学校出身者とのコミュニケーションが難しくなることや、教授言語の違いから教育環境への不適応等も考えられるであろう。キルギス国内にはキルギス語で教授することを教員に課している大学もあるが、部局によっては入学希望者が集まらない等の影響が出ていることが報告されている (Kellner-Heinkele & Landau, 2015)。

表10より、キルギス語学校出身の学生は「新聞」「テレビ番組」ではキルギス語とロシア語を選択しているのに対し、ロシア語学校出身学生は「新聞」「テレビ番組」「インターネット」のいずれの項目もロシア語のみを選択する学生が多数を占めた。キルギス国内においては、ロシア語マスメディアが主導的地位を占めているとされており (中澤他, 2006)、キルギス語マスメディアの国内での地位の低さが影響していると思われる。さらに、小田桐(2015)では、従来の研究成果から電子及び紙媒体によるリソースの70%にロシア語が使用されていることや、キルギス語マスメディアに対して「新しい情報や分析がなく、おもしろくない」といったキルギスの人々によるステレオタイプも報告されている。また、キルギス語モノリンガルとなる可能性のある農村部のキルギス語学校出身者はキルギス語のみのマスメディアにしか接触できず、初等中等教育段階をどの学校で過ごすかによって、アクセスできる情報に格差が生じることも考えられる。

5. まとめと今後の課題

5. 1. 本研究のまとめ

本研究は、質問紙調査の分析からキルギスの大学生の言語選択及び使用を究明するものであった。以下に、研究課題に基づき、本研究で得られた知見をまとめる。

・バイリンガル環境にあるキルギスの大学生は、大学生生活に身近な場面においてキルギス語とロシア語あるいはキルギス語かロシア語という選択をどのように行い、実際はどのように

(10)

使用しているのか。

キルギス語学校出身の大学生は日常生活内、特に話す場面でキルギス語の使用率が高く、キルギス語のみのマスメディアへの接触が極端に低いことが明らかになった。学生の多くが「加算的バイリンガル」である可能性やほぼ互角の言語能力を有していても、言語ごとに得意な領域があることが先行研究においても指摘されている（ハーディング＝エッシュ＆ライリー、2006；山本他、2014）ことから、場面状況や聞き手との関係性に依じてキルギス語とロシア語を使い分けており、大学生活の中でキルギス語集団とロシア語集団という異なったコミュニティの両方に接していることが考えられる。

ロシア語学校出身の大学生は、今回調査したほとんどの場面でロシア語の使用率が高く、授業中のメモやノートテイキングで特にロシア語の使用が顕著にみられた。キルギス語学校の生徒とは対照的に「減算的バイリンガル」である可能性があることや、キルギス人同士であってもロシア語が使用されている（渋谷、2007）こと、今回の調査対象となったキルギス系以外の民族ではロシア語が主に使用されている（Landau & Kellner-Heinkele, 2001）ことから、大学生活において接触するコミュニティはキルギス語集団よりもロシア語集団の頻度が多く、使用言語がロシア語のみでも生活が成立していることが考えられる。

5. 2. 今後の課題

今回実施した調査では民族別には分析しなかったが、民族によって言語選択及び使用に影響が生じることも報告されている（Landau & Kellner-Heinkele, 2001）ため、より多くのデータを集計し、分析を行う必要がある。今回の調査では、場面の聞き手がいかなる人物であるか具体的に指定しなかったため、親疎や上下関係といった要素以外にも、民族（話し手と同じ民族なのか、異なる民族なのか）等も含めて、質問紙調査や実際の談話データを収集しより詳細に分析を行うことが必要であろう。

また、Korth（2005）のように学校の教授言語によって学生の言語使用に差異があることも考えられるため、キルギス語が教授言語である大学と今回得られた結果を比較し、キルギスの大学生の言語選択と使用の実態を明らかにしていく必要がある。Landry and Allard（1992）はカナダの英語・フランス語バイリンガルの高校生を対象に、生徒を取り巻く要因「社会的レベル（Sociological level）」「社会心理学的レベル（Socio-psychological level）」「社会的レベル（Psychological level）」「言語使用（Language behaviour）」それぞれの関わりからバイリンガルのタイプを分析し、「巨視モデル（Macroscopic model of the determinants of additive and subtractive bilingualism）」を提唱している。Landry and Allard（1992）のように、キルギスの学生の言語使用を要因別に整理し、いかなる要因でどのようなバイリンガ

ルが育つのかを分析し、学習者のバックグラウンドを踏まえ、多言語環境にあるバイリンガルを対象とした日本語教育研究に結びつけていくことが重要であると思われる。

注

- (1) 「キルギス共和国」の国名をめぐっては、文献によってはキルギス語での表記や現地事情等に配慮し、「キルギスタン」「クルグズ」「クルグズスタン」が用いられることもあるが、本稿では日本での慣用（外務省等）に従い、「キルギス共和国」とした。
- (2) キルギスの初等中等教育機関において、当該機関の教授言語が何語であるかによって便宜的に「キルギス語学校」「ロシア語学校」と呼ぶこととする。キルギス国内には他にもウズベク語学校、タジク語学校等も存在する。

【引用・参考文献】

- 入山美保 (2010) 「キルギス共和国における日本語教育の現状と課題」『筑波応用言語学研究』17、pp.85-98、筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース
- ヴォロビヨワ・ガリーナ (2013) 「キルギスの日本語教育事情（日本研究の新しい動向）」『世界の日本研究』、pp.59-67、国際日本文化研究センター
- 氏原名美 (2015) 「キルギス共和国日本語教育事情 頭脳流失－日本語教師のジレンマ」『日本語教育から見た国際関係報告書 2014』、pp.15-35、国士館大学
- 小田桐奈美 (2015) 『ポスト・ソヴィエト時代の「国家語」』、関西大学出版部
- 国際交流基金 (2017) 「日本語教育 国・地域別情報 キルギス 2017 年度」
<https://www.jpfi.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2017/kyrgyz.html>
(2019年2月8日アクセス)
- 国連人口基金 (2018) 『世界人口白書 2018: 選択のカリプロダクティブ・ライツと人口転換』、UNFPA
- 西條結人 (2016) 「キルギス共和国の高等教育機関における日本語教育実践に関する研究: 「動画制作」を取り入れた授業開発の試み」『語文と教育』30、pp.138-120、鳴門教育大学国語教育学会
- 西條結人 (2017) 「キルギス共和国における日本語教育の現状と課題－「現地化」した日本語教育ネットワークの構築・改善を目指して－」『キルギス日本語教育研究』1、pp.48-59、キルギス共和国日本語教師会
- 西條結人、ジュヌシャリエワ・アセーリ、ダウレットバエワ・ジャミリヤー、メデルベコワ・

(12)

- チオルボン、知念美和、吉川巧也、幾田伸司（2016）「『日本語教育実習』の新しいプログラム開発と実践を目指して：キルギス共和国で実施した教育実習の課題と展望」『鳴門教育大学国際教育協力研究』10、pp.11-17、鳴門教育大学教員教育国際協力センター
- 西條結人、ジュヌシャリエワ・アセーリ、メデルベコワ・チオルボン、ダウレットバエワ・ジャミリヤー（2016）「キルギスの高等教育機関における「優れた」日本語教師の行動特性：キルギス人日本語学習者への質問紙調査の分析から」『海外日本語教育研究』2、pp.37-51、海外日本語教育学会
- 渋谷謙次郎（2007）「『母語』と統計－旧ソ連・ロシアにおける「母語」調査の行方－」『ことばと社会 多言語社会研究』10月号、pp.175-207、三元社
- 田岡希望、加美梓、西條結人、田中大輝、小野由美子（2017）「『紹介』活動を軸に展開した日本語授業実践：孤立環境で学ぶキルギス人学習者を対象として」『語文と教育』31、pp.73-55、鳴門教育大学国語教育学会
- 中澤英彦・白山利信（2006）『世界のロシア語 2003：ロシア連邦外務省報告書 上巻』東京外国語大学語学研究所・筑波大学外国語センター
- ハーディング＝エッシュ・インデイス、ライリー・フィリップ『バイリンガル・ファミリー』（山本雅代訳）、明石書店
- フィッツジェラルド・ヘレン（村田泰美、重光由加、大谷麻美、大塚容子訳）（2010）『言語学翻訳叢書第11巻 文化と会話スタイル－多文化社会・オーストラリアに見る異文化コミュニケーション－』、ひつじ書房
- 山本雅代（編）、井狩幸男、田浦秀幸、難波和彦（2014）『バイリンガリズム入門』、大修館書店
- Grosjean François（2008）Studying Bilinguals, Oxford University Press, Oxford
- Landau M. Jacob, Kellner-Heinkele Barbara（2001）Politics of Language in the ex-Soviet Muslim States-Azerbaijan, Uzbekistan, Kazakhstan, Kyrgyzstan, Turkmenistan and Tajikistan, Hurst and Company, London
- Jose Joaquin Brunner and Anthony Tillet（2007）Higher Education in Central Asia : The Challenges of Modernization, The world Bank
<http://documents.worldbank.org/curated/en/266211468235483571/pdf/689260ESWOP0850rnization00200700eng.pdf>（2019年2月8日アクセス）
- Kellner-Heinkele Barbara, Landau M. Jacob（2015）Iazykovaia politika v sovremennoi tsentral 'noi Azii : Natsional 'naia i etnicheskaya identichnosti i sovetckoe nasledie, Tsentr knigi Rudomin, Moscow
- Korth Britta（2005）Language Attitudes towards Kyrgyz and Russian ; Discourse,

Education and Policy in post-Soviet Kyrgyzstan, PETER LANG, Bern

- Landry Rodrigue, Allard Réal (1992) Ethnolinguistic Vitality and the Bilingual Development of Minority and Majority Group Students, Maintenance and Loss of Minority Languages (Studies in bilingualism 1), pp.223-251, Amsterdam/Philadelphia
 - Orusbaev Abdykadyr (1990) Iazykovaia zhizn' Kirgizii, Izdatel'stvo Ilim, Frunze
 - Orusbaev Abdykadyr, Arto Mustajoki, Ekaterina Protassova (2008) Multilingualism, Russian Language and Education in Kyrgyzstan, International Journal of Bilingual Education and Bilingualism, 11(3-4), pp.476-500
- (さいじょう ゆうと・四国大学全学共通教育センター、広島大学大学院教育学研究科博士課程後期)

【資料】

資料 1 1994 年のキルギスにおける民族別言語使用状況 (%)

	家 庭			学校もしくは大学			職 場		
	民族言語	キルギス語	ロシア語	民族言語	キルギス語	ロシア語	民族言語	キルギス語	ロシア語
キ ル ギ ス	97.8	×	1.8	87.4	×	12.3	82.6	×	17
ロ シ ア	99.6	0.2	×	99.7	0.2	×	99.5	0.4	×
ウ ク ラ イ ナ	4.3	0.1	95.2	—	0.3	99.7	0.2	0.9	98.7
ベ ラ ル ー シ	0.5	2.4	96.2	—	4	88	—	—	98.9
ウ ズ ベ ク	95.8	1.6	2.4	86.4	3	10.4	73.1	6.2	20.4
カ ザ フ	46.2	26	26.1	—	21.2	78.6	2.4	17.8	79.1
ジ ョ ー ジ ア	25.9	20.4	51.8	—	25	75	—	25	75
アゼルバイジャン	51	0.2	25	—	7.3	69.1	2.1	10.7	71
ラ ト ビ ア	—	—	100	—	—	100	—	—	100
モルダヴィア	5.5	3.6	89.1	—	—	100	—	10.7	89.3
リトアニア	4.5	—	91	—	—	100	—	—	100
タ ジ ク	67	3.7	6.5	20.7	7.2	27.9	13.2	20.8	40
アルメニア	20	—	78.2	—	—	100	—	—	100
トルクメン	4.3	27.7	59.5	—	25	50	—	39.1	56.6
エ ス ト ニ ア	—	—	100	—	—	75	—	—	100
タ タ ー ル	36.5	4.1	55.7	—	3	94.4	1	5.5	91.1
ユ ダ ヤ	2.7	—	95.7	—	—	100	—	—	100
ド イ ツ	6.6	0.1	93.1	—	0.2	99.8	0.2	0.3	99.5
ウ イ グ ル	57.6	7.5	20.6	0.6	10.2	75.7	2.1	9.8	78.1
ド ン ガ ン	90.5	1.2	5.2	1.6	0.1	95.3	19.9	1.8	75.7
朝 鮮	18.6	0.4	80.8	—	—	100	0.6	1.1	97.9
ト ル コ	72.7	13.8	5	2.7	33.3	53.1	2.3	30.2	55.8

(Landau & Kellner-Heinkele, 2001 を筆者が日本語訳、再編集)